

Title	デモクラシーとピューリタニズム
Author(s)	大木, 英夫
Citation	聖学院大学総合研究所紀要, No.3, 1993.3 : 107-125
URL	http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/reps/modules/xoonips/detail.php?item_id=2987
Rights	



聖学院学術情報発信システム : SERVE

SEigakuin Repository for academic archiVE

デモクラシーとピューリタニズム

大木英夫

一 始めに——歴史的にして普遍的なもの

日本国憲法第九十七条「基本的人権の本質」はこう規定している。「この憲法が日本国民に保障する基本的人権は、人類の多年にわたる自由獲得の努力の成果であつて、これらの権利は、過去幾多の試練に堪え、現在及び将来の国民に対し、侵すことのできない永久の権利として信託されたものである」。また前文①は、この権利が「人類普遍の原理」であると述べる。「人類の多年にわたる……努力の成果」ということはそれが歴史的に成立したものであることを認めるものであり、他方その歴史的な成果が「普遍的原理」であるという。歴史的なものと普遍的なものとは、一般に矛盾すると言われる。しかしここでわれわれは、歴史的にして普遍的なものを探究せねばならない。人権とかデモクラシーとかは、このような「歴史的普遍」である。

二 デモクラシーとピューリタニズムとの関係——イエリネックとリンゼイに導かれて

わが国でこの結びつきを言うことでは、わたしは最初となっているようである。そのためわたしの導きとなったのは、ウッドハウス (Woodhouse) の *Puritanism and Liberty, Being the Army Debates (1647-9) from the CLARKE MANUSCRIPTS with Supplementary Documents* という資料集である。このような結びつけは、最初ブルンナーから聞いたが、れっきとした歴史的テーマとなっていることを知った。ウッドハウスの本にリンゼイが序文を書いている。ウッドハウスは、ミルトンの政治思想の研究者でもあった。リンゼイは、この本を、「デモクラシーへの信仰に理由を与える」ことを欲する者また「デモクラシーの根本理念に対し安直な反駁を述べる口やペンを封じる」ことを欲する者の必読書として推薦した。そして、「自由、平等、兄弟愛というこれらの理念が、もしそれらの基礎にある宗教的コンテキストから切り離されるならば、安っぽいものとなり、浅薄なものとなり、簡単に論駁されるものとなってしまおう」と警告した。また、一九五〇年版の後書きとしてリンゼイは、「この研究は、今や新しい重要性を帯びるに至った。それは東欧に全く新奇なデモクラシーの理念が台頭し広まってきたからである。東欧のいわゆる人民民主主義とは区別された西欧デモクラシーの諸特質は、他のいかなるものに勝って、本書を研究することにより理解することが可能である」と書いた。ところでこの事実は、アメリカにおいて、戦後の発見であった。ハーラー (William Haller, *The Rise of Puritanism*, 1938, 1947, 1957) や、ウォルフ (D. M. Wolfe, *Leveller Manifesto*) や、ペテコルスキ

(Petegorsky, *Left-Wing Democracy in the Puritan Revolution*) や「セイバイン」(Sabine ed., *Works of Winstanley*) や「アーサー・バーカー」(Arther Barker, *Milton and the Puritan Dilemma*) のような研究者が次々と研究を発表した。そのような知的渦巻きの中心に、知らずしてわたしは入っていった。ユニオン・セミナリの図書館には、マカルベン・コレクションがあった。そしてまた、その図書館で、ブルンナーの小さな書、ユニオンに献呈された本を発見した。
Die denkwürdige Geschichte der Mayflower-Pilgerkinder (1920) である。

リンゼイによってデモクラシーを知る、それは、歴史認識における一つの方法論的問題でもある。たとえば歴史上のイエスをどう理解するかという問題がある。そこにアポストリック(使徒的)な認識という可能性がある。リンゼイは、デモクラシーの「使徒」ということができる。一九四〇年五月にリンゼイは「Believe in Democracy」と題する連続ラジオ放送を行った。それはヒトラーのオランダ侵攻による第二次大戦勃発の頃であり、このデモクラシーの試練の時にその意味を明白に国民に訴えたものであった。その中でリンゼイは「the soul of democracy」と言うが、「魂」とは外から見えないものである。だから内面的な理解を必要とする。「内面的歴史」(H・R・ニーバー)の理解は、過去と現在との間に共鳴がおこるときに理解可能となる。リンゼイは、レインブラの言葉に共鳴している。この共鳴は、歴史を現代から読み込むことではない、そうではなくて、魂をもつような歴史を真に理解するための前提条件である。現代にまで影響を及ぼしてきたものの「魂」に触れ、こちらの「魂」も共鳴するまでに成長し、それによって歴史を解釈するということである。ドイツ語で言えば、「Wirkungsgeschichte」の立場である。すべて「魂」をもつものの「解釈」は、「解釈者」がどこから由来するか(チェロ奏者トゥルトウリエが自分はカザルスから来ていると語った)、ということに

あると思う。それが特に日本では重要なことだと思う。「人類の多年の努力」によって影響を与えてきたそのトラディションに参入することなしに、そのトラディションを理解できない。その参入が解釈を可能にする。それは客観的見方を排除するのではない。客観的な見方を位置づけることになる。(わたしは、イエリネック・リンゼイから来ていると思っている)。この命綱につかまらないで、日本人の解釈主体は確立しないのではないか。デモクラシーを、たとえば、まずラスキとかヒルによって知ってはならない。デモクラシーの使徒から学ぶのでなくてはならない。デモクラシーは、リンゼイにおいて第二次大戦の「試練に堪え」た。リンゼイにおいて明らかになったことは、英国に発生するデモクラシーが、フランスのそれと異なること、また東欧の人民民主主義とも違うということである。リンゼイの基本的考え方は、デモクラシーが宗教的背景から出たということである。『民主主義の本質』の中で、デモクラシーのピューリタンのコングリゲーションから由来するということを、特に彼が序文を書いたウッドハウス編集の書に含まれたクラーク文書によって確信した。

このテーマは、最近では、Donald Pennington and Keith Thomas (ed.), *Puritans and Revolutionaries, Essays in Seventeenth-Century History presented to Christopher Hill, 1978, 1982* (Paperback edition) に含まれた Brian Manning (Senior Lecturer in History, University of Manchester) の論文 *Puritanism and Democracy, 1640-1642* において、それがピューリタンのコングリゲーションから国家へと応用されたのか、それとも逆かはともかく、デモクラシーとピューリタニズムとの関係の密接性とその中で多様性について指摘した。しかし、その間に密接な「関係」があることは、依然として明白に捉えられている。

もうひとりの導き手は、イエリネックである。イエリネックは、人権理念の源泉についての学術的証人である。パプテスマのヨハネがイエス・キリストを指さしたことにことよせて言えば、イエリネックは、人権理念に対するヨハネの指だと言える。その指さすところによって、われわれは人権理念の源泉を見出す。それがレヴェラーズの文書であり、今日ウッドハウス編集の書に集められている。そこでイエリネックとリンゼイとは落ち合う。

イエリネックは、ハイデルベルグでヴェーバーやトレルチの先輩同僚であった。ヴェーバーもトレルチもイエリネックの影響を受けた。トレルチもヴェーバーも、イエリネックへの学問的恩義を感じている。イエリネックは、ウッドハウスの資料集の背景をなすあたりの実証的研究をトレルチに期待した。しかし、トレルチの研究は、原資料に渡らなかつた。彼の研究は、歴史のマクロ的な潮流を観察し、近代世界の成立との関係で、ピューリタニズムを位置づけ、評価することに留まった。トレルチが最後にもし幼児洗礼を認めたとすれば、基本においてイエリネックとヴェーバーと異なると思う。

他方、ヴェーバーは、『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』で彼自身の関心からそのあたりを研究した。安藤英治氏は、『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』のこれまでの研究が、ヴェーバーの関心をせまく「個人」の行為の問題として見、そこにもっと重要な「団体結成」の問題があることが見失われたことについて指摘し、その原因がそこに上記書の「大改訂」の見落としによる立体的なヴェーバー解釈の欠如にあると見て、その改訂箇所を訳出したが、そこにイエリネックのことが言及されていることを発見した。⁽²⁾「良心の自由」の発生史と政治的意味にとって基礎的重要性をもつのは、周知のようにイエリネックの「人権宣言」である。わたし自身もまた、ピューリタニズ

ムと新しく取り組むようになったのは、まさにこの書物のお蔭なのである」(*Archiv für Sozialwissenschaft und Sozialpolitik*, Bd. XXI, 105, S. 43)。問題は、トレルチとヴェーバーとが、イエリネックから何を学んだかということである。テーマに即して言えば、ピューリタニズムやアメリカへの関心ということである。しかし、それによってヴェーバーは、安藤氏が言うように、「ドイツ的精神構造に対する自己批判」を企てたのであり、更に、ヴェーバーの宗教社会学に開示される「普遍的」問題との取り組みが課題として出てくるのである。トレルチの場合は、自国への批判はあるが、西欧とドイツの和解に関心があったのではないか。

イエリネックは、「国家学」の学者であつた。つまり、それは国家をトータル・ラディカルに取り扱う学問である。イエリネックは、人權論を、国家論と関連づけて考えた。レオ・シュトラウスは自然権によって同じことを言うが、人權論は国家論を構造的に変えることになると思つた(この点でレオ・シュトラウスに先んじている)。イエリネックがユダヤ人であつたことは、この問題意識において見過ごしにできないことと思う。ユダヤ人的な外からの視点をもつてでなければ、見られないようなものをもつていた。それは、十九世紀を通じて問題となりつづけたいわゆる「ユダヤ人問題」である。それはキリスト教的ヨーロッパにおけるユダヤ人の存在とその解放の問題である。ブルーノ・パウアーは、啓蒙主義的歴史観をもつて、宗教から脱却することを求めた。そしてそれは国家の非宗教化を要求する。マルクスは、アメリカを挙げて、非宗教化された国家において、かえつて宗教が繁茂する事実を指摘し、そして「宗教が存在することとは、社会に欠陥 [Mangel=Beschranktheit] があることである」⁽³⁾という前提に立ち、政治的解放としてのフランス革命ではなく、それを「人間的解放」へと徹底しようとする。しかし、それは結局は、啓蒙主義の徹底ということでも

ある。これに対して、イエリネックは、全く別な仕方で、或いは秘かに、ユダヤ人の生きることの出来る社会を、「学問」の仮面のもとで、現実即して究明しようとしたのではないか。それはフランス革命的な非宗教化ではなく、信仰の自由、良心の自由に基づく人権である。そしてそれが歴史的にアングロ・サクソンのプロテスタンティズムにおいて発生してくるのを見た。そしてそこには、コルプス・クリスチアヌムの体制の変革が求められる。従って、イエリネックには、確かに、安藤氏が指摘するような「団体結成」の問題が潜んでいた。そしてそれは、教会とセクテという議論となる。この見方は一般的に見て正しい。そこで「セクテ」という概念が用いられているが、それは、リンゼイのいうコングリゲーションを意味する限り、正しい。ヴェーバーは、イエリネックを受け継いで、安藤氏が言うように、「ドイツ的精神構造に対する自己批判」を企てた。

三 ピューリタン・コングリゲーション

イエリネックに導かれて、そこに残された課題をもっともよく追求するとすれば、それはピューリタニズムに資料的に密着し、そしてコルプス・クリスチアヌムの崩壊から近代社会の成立の過程における「団体結成」のメカニズムを明らかにすることである。そこで、わたしは、契約神学を手掛かりとしながら、ピューリタニズムがいかにしてコルプス・クリスチアヌムを解体し、そして新しい契約社会を形成していくかを見ようとした。それは、イエリネック・テーゼを受け継いで、ヴェーバーよりも、トレルチよりも、もっと資料に密着した形で、明確にしていくということである。

この研究は、思想史と社会史と経済史と政治史と法制史などが相互に絡み合う学際的な視野を要求し、そして対象とのトータルかつラディカルな取り組みを必要とする。

① 思想史——アングリカニズムとピューリタニズム、特に、契約神学を明らかにすることが課題となる。

② 社会史——トレヴェリアンの『イギリス社会史』から始まる政治史や経済史と区別されかつその両者を補うような社会史の研究から、社会変動を捉えることが必要である。

③ 政治史——絶対王制と議会との相剋については、多く議論されてきた。

④ 経済史——ヴェーバーがその先蹤となった近代資本主義の発生と興隆の問題である。そこにピューリタニズムとの関係が出てくる。

⑤ 法制史——英語世界では、憲法史 (Constitutional history) ということになるが、ステュワート王朝は、憲法史的に大きな変動を経験した。思想史にまたがるが、法の問題とくに自然法の問題、自然法から自然権への転換の問題が出てくる。

どこでこれらの諸視点を統合するか。それはその時代は依然としてキリスト教が重要な位置をもっていたので、「ピューリタニズム」という歴史概念をもって統合的な視点を構築することとする。事実この時代は、キリスト教が中世以上に影響力をもっており、それがあらゆる面に滲透関与していた故に、歴史的にいつて、イギリス革命は「ピューリタン」革命であり、そこに頂点があるように、ピューリタニズムをもって統合することは、決して不当ではなく、むしろ十七世紀の歴史の実体に即することになる。それ故、ピューリタニズムを単に宗教意識の面に限定して捉えることをし

ないため、われわれはそれを、ピューリタン・コングリゲーションという社会学的存在において捉えることにする。

最近のわが国における研究者は、ヴェーバーに導かれながら、このピューリタン・コングリゲーションに注目した。それは、安藤英治氏のいう「団体結成」の面に触れたものということができる。問題はその微視的な研究が、ヴェーバーにおける、或いはイエリネックにおける、普遍的視野の中で企てられることだと思う。

最近の研究書の中で、今関恒夫『ピューリタニズムと近代市民社会』（一九七八年、みすず書房）は、副題が「リチャード・バクスター研究」とあるようにバクスターを中心としその背景を見た研究であるが、「祭り・スポーツあるいは居酒屋の『飲み仲間』によって高揚される共同体の心情に根差した伝統的包括的村落集団と、その集団を基盤として屹立する絶対王政の政策体系とが一方にある。その伝統と政策とに、結果として対決することになるピューリタニズムを奉ずる思想集団あるいは『信仰共同体』が他方にある」としてコングリゲーションとわれわれが呼んだ共同体の重要性に着目し、バクスターをそのような集団形成者として捉えようとする。しかし、それは社会学的解釈のレベルに留まり、構造的なところに深く立ち入っていない。

常行敏夫『市民革命前夜のイギリス社会——ピューリタニズムの社会経済史』（一九九〇年、岩波書店）は、副題にあるように、ピューリタニズムを社会経済史的な角度から見たものとして、独自の実証研究を展開し、その時代状況の理解に相当の益を与えている。しかし、そこには、ヴェーバーの関心がもつ「普遍的」スコープが著しく後退し、大塚久雄のヴェーバー理解をめぐる肯定と否定とに囚われ、研究の緻密さを求める代償として、ヴェーバーがイエリネックに触発されて打ち開いた視野が狭隘化された嫌いがある。「ピューリタニズムの『非人格的』なエートスがその誕生に

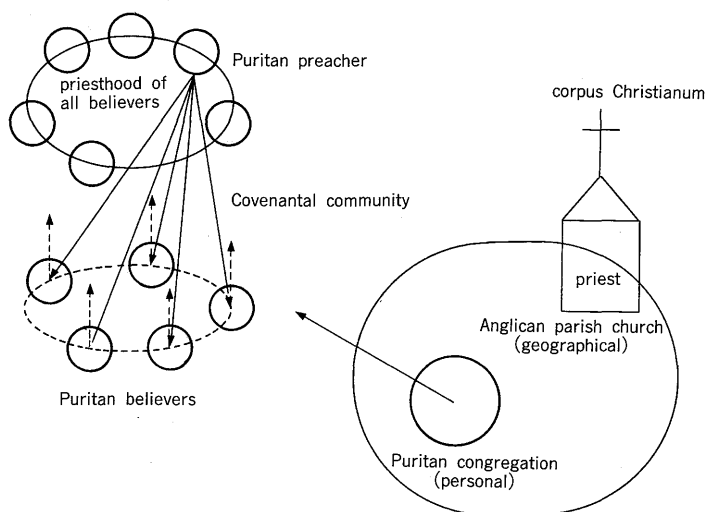
貢献した、自由主義的な資本主義社会と民主政治は、ヴェーバーが彼の全生涯を賭けて擁護しようとしたものだったのであり、ヴェーバーはその可能性の一つを『ゼクテ』原理に求めていたのである⁽⁵⁾』という逆説的な見方は、イエリネックから由来する問題意識を正しく言い表しているが、これは本書の最後に出た言葉であって、本書においてとられた視座からは十分展望できないのではないか。それにもかかわらずこの研究もまた、「ゼクテ」の重要性を意識し、そしてピューリタン・コングリゲーションを「教区エリート」として捉えて、それに注目している。しかし、それが次のような「逆説」の魅力にとらわれたような結論だけでは、ピューリタン・コングリゲーションのもつ意味を十分に汲み尽くしたとは言いがたい。「ヴェーバーにとって問題なのは、そうした価値が人間にどのような社会的行為を取らせるかということであり、だからこそ、『人間的』で『自然的』で『温かな』価値が権威に弱いというネガティブな社会的評価と、『非人間的』で『自然の地位』を克服した『窮屈な』価値が民主主義を支える反権威的傾向を持つといポジティブな社会的評価が可能となるのである⁽⁶⁾」。

ウッドハウスの資料集を読んで見えてくることは、ピューリタニズムとデモクラシーとの歴史的関係の中で、ヴェーバーやトレルチが見たようなヨーロッパ文化の全体に関わる普遍的な転換の諸相である。それは、ヴェーバーのように「普遍的な諸問題」⁽⁷⁾、もっと限定して言えば「近代化」という普遍史的問題として、取り組まれねばならない問題である。

その関係面に出てくるコングリゲーションとは何か、それがこの転換に如何なる意味と役割をもったか、それが大きな問題となってくる。そこにヨーロッパ史におけるコルプス・クリスチアヌムからコングリゲーションへの転換の過程

を見てとることができる。この転換の中に、ヨーロッパ中世から近代への転換、近代化の過程の開始の構造を読み取ることができると考えられる。この課題を念頭において、ここでは、ピューリタン・Congregationalismの研究、とくにイデアール・タイプスとしてのピューリタン・Congregationalismの研究が企てられることになる。歴史の実体としては、例えば後にメイフラワー号でアメリカに渡るスクルービーのCongregationalismなどが典型となるであろう。そこに、パリッシュからCongregationalismへの移行の歴史的事実経過がある。この移行の中に、思想史、社会史、政治史、経済史、法制史などの統合的な連動が現れ出る。人権概念の成立は、社会変動過程との深い関わりの中での出来事だということであって、その軌跡をもっともよく表しているのが、イギリスのピューリタン革命とそれ以後、またアメリカ植民地の発展である。その社会変動過程とは、Colburn・Christendomの解体、そこから近代憲法の特色を示す原則として登場する「教会と国家の分離」、そして社会について言えば、German ShaftからGessel Shaftへという変化、国家について言えば、有機体的国家から契約的国家へ、教会について言えば、ParishからCongregationalismへという変化である。

われわれは、Colburn・Christendomの解体を、ParishからCongregationalismへの変化過程において捉えることにする。この場合、Congregationalismは、ヴェーバーのいわゆる「理念型」としての「Congregationalism」である。現実存在するCongregationalismは、諸条件によってその形を変えることがある。現実存在するCongregationalismの中には、しかし、イデアール・タイプスとしてのCongregationalismの形はおぼろげにでもあらわれている。イデアール・タイプスは、歴史理解のためホイリスティックな役割を果たすものとして用いられる。以下にこの変動



過程を検討してみたい。

まず、ピューリタニズムは、宗教改革においてスコットランド長老派のような成功をおさめ得なかったことによって運命づけられている。その形態は、「運動」という性格をもつに至った。その強さは、伝統的なパリッシュの単なるリフォームではなく、その解体を惹き起こすようなものとなった。その中から新しい政治理念が発生し、その新しい政治理念が解体を正当化するようになった。

(1) ピューリタン説教者の出現——宗教改革、アングリカニズムとピューリタニズム、改革派、聖書主義、契約神学、大学教育。

(2) ピューリタン説教者の招聘——それは、アングリカニズムとは違う人事をしなければならない。実力において強力であること。プリーストからプリーチャーへ。

(3) ピューリタン・コングREGATIONの成立——①パリッシュからコングREGATIONへの教会構造の変化、それが聖書によって裏付けられる。コルプス・クリスチアヌム体制の崩壊。②経済的

には、タイス（十一税）からオッフアリング（自由献金）へ。その社会的条件として、社会的経済的自由が必要。

(4)ピューリタン・コングリゲーションの確立——①説教はドクトリンとユースの二つの部分をもち、倫理性をもつ。「生の改革」。②契約結束、地理的でなく、人格的な一種ヴォランタリ・アソシエーション。その確立は、人格的堅固さによる。そこに訓練の必要。サバタリアニズムの意味。

リンゼイがデモクラシーを「社会の理論」というが、社会全体のこのような構造変化には、ブライアン・マニングが言う牧師の招聘と教会統治という機構面だけでなく、もっとトータル・ラディカルなエートスの変化が起こらねばならないのである。そこに敢えて言えば「普遍史」的出来事が起こるのである。それは、政治的にはピューリタン革命として発生する。

IV レヴェラーズの『人民協約』とその背後における自然法から自然権への変化

イエリネックは、人権理念の源流を、レヴェラーズの『人民協約』に見た。ピューリタン革命の中で、新しい憲法制定を巡る論争が起こった。それがウッドハウス編集の資料集に含まれたクラーク文書である。リンゼイは、そこに出てくるレインバラの発言「イングランドのもっとも貧しい者も、もっとも富める者と同じく生きるべき命をもっている」との共鳴において、デモクラシーの根本を理解している。その「自己確信」は、やがて一六四九年の国王裁判と処刑という出来事と連動していく。その「自己確信」は、一六六〇年に国王裁判の罪の故に刑死したトーマス・ハリソン大佐

の処刑台の言葉に出ている。ヴェーバーは、チャールス一世の処刑においてイギリス人が、ドイツ人には到底及ばない「誇り高い自己確信」をもっていることを指摘する。「伝統的な権力者の首を斬り落とすだけの神経を一度たりとも持つことのなかった民族（われわれドイツ人がそうなのです）は、アングロ・サクソン人を世界の中でわれわれに優越させている、あの誇り高い自己確信を持てるようには決してならないのです」。それは、ピューリタン革命に参加した人間の典型的なものであり、それがレヴェラーズ（たとえばリルバーン）の中にはつきりと現れ出る。問題は、この「自己確信」を支えた背後構造である。

「自己確信」を支える法的根拠とは、イエリネックが指摘した「人権」理念である。レインバラの宣言は、人権意識によって裏付けられている故に、単なる宣言ではない。リンゼイは、デモクラシーを「社会の理論」(a theory of society)⁽⁸⁾ と言うが、そのようなものとして、人権理論が原理的な社会構造の変化を惹き起こす。その構造変化を捉えるのは、構造に関わる諸要素、諸理念、諸条件を注意深く分析せねばならない。その中で特に「人権」理念の成立、自然法から自然権への転換が基本的なものとして重視される。われわれの見方は、この転換過程を、単に思想史、単に制度史だけで見てはならないということである。例えば、タックは、戦後三〇年 (Richard Tuck, *Natural Rights Theories: Their origin and Development*, 1979) の「a curious phenomenon」⁽⁹⁾ は、「人権という言葉が一般政治的議論の中にあつた重要な役割を演じるようになった」こと、そしてアカデミックな世界でそれは「とらえどころのない、必然性のない種類の議論」と見做されていることだと言う。彼は、権利思想が、奴隷制や絶対主義的国家の擁護になることを指摘し、しかもその「保守的絶対主義的伝統から、よりリベラルな権利理論があらわれ出た」⁽¹⁰⁾ ことを認め、その源泉に

グロテュウスを見ている。グロテュウスは、その両方の伝統の創始者と認められる。しかし、なぜグロテュウスにおける両義的な見方が、リベラルな権利理論になったのかについて説得的な説明はない。事態は、このような思想史だけでは明らかにならないであろう。イエリネックは、「しかし、学説というものは、もし具体的な歴史的・社会的事情において、それが影響力を及ぼすために準備された土台がなければ、それ自体では何かを産み出す力があるわけでは決していない。もしある理念の学説上の起源がわかって、それで、その理念がいかなる実際上のイギリスを黙過⁽¹⁾ということの歴史もわかったことには決してならない」と言う。

十七世紀の自然法思想は、内的に関連しあう四つの特徴的概念をもっていた。①自然状態 (the state of nature)、②社会契約 (the social contract)、③抵抗権 (the right of resistance)、④人権 (the rights of man) である。これらがいかんインテグレートされるか。ダントレーヴは、次のように言う。

「わたしがここに思い出すのは、政治理論の中には真に新しいものはほとんどないと、カーライル博士が常によくいわれたことである。人々は古いスローガンを幾度も繰り返し続けてきた。新しさというものは、非常にしばしば、ただアクセントの問題に過ぎない。『民主制』、『社会契約』、『自然法』は、逆に跡づければギリシャ人にまでさかのぼるであろう。しかし、アリストテレスの民主制はジェファソンのそれではない。また、ソフィストたちが社会契約の思想に近づいたという事実、われわれにルソーをよりよく理解させるために多くの援助を与えるものではない。自然法については、ほかならぬブライス卿が、『ほぼ二千年の間、無害の格言、およそ倫理学の平凡

な常套語であつたもの』が、ある瞬間に『ダイナマイトの塊』に転化せしめられ、『一つ旧来の王制を粉碎してヨーロッパ大陸を震動させた』と指摘している。われわれは、この歴史的な謎を解くことがでなければ、自然法について多くを知っているなどと称すべきではない。⁽¹²⁾

この「歴史的な謎」の解明が、人權理念の成立事情の説明となるであろう。イエリネックの指摘は、この関連で重要である。Es fehlt der lex naturae des Mittelalters und der Neuzeit der propagandistische Charakter, der Staat und Gesellschaft umzuge stalten strebt.⁽¹³⁾「中世および近代の自然法には、国家と社会とを变革しようとするプロパガンディシユな性格が欠けている」。そして、自然法が人權理念を産み出すように作用するには、イエリネックは「他のものもろの力が加わらなければならなかった」と言う。一体それは何か。他方、イエリネックは、人權理念が、イギリスのマグナ・カルタや『權利請願』などの權利概念と異なることも指摘する。この指摘は正しい。そこに関係はある。しかし、ピューリタン・コングリゲーションにおける人間の主体の確立過程で、人權意識が産み出されるのは、触媒によつて惹き起こされた一種の歴史的「化合」とも言うべき出来事であつた。その触媒となつたのは、ピューリタニズムである。それ故ダントレーヴのいう「歴史的な謎」の解明は、ピューリタニズムの解明からして解明されることになる。

ピューリタニズム特有の「契約神学」は、歴史神学的要素と、倫理神学的要素との両面をもつていた。前者は、救済史的スペキュラティヴな性格をもち、後者は、倫理的コントラクチュアルな性格をもつていた。歴史神学的展望において、自然状態とイギリス人の生得権といわば化合して実践的エネルギーを産み出す歴史意識となつた。ノルマンの軼

の歴史観がそこに取り入れられ、その軌から解放されることを志向する倫理性が産み出された。神との契約的コントラクトチュアルな責任意識において、抵抗権と自然法とは化合し、自然権という自己保存という主体的自覚を産み出した。のちにロックはフィルマーの『パトリアーカ』の論駁を試みることになるが、それは、国王派の保守的自然法思想に対する、自然権思想の自己主張である。ピューリタン革命においては、自然法と自然法（自然権）とが争った。

自然法から自然権への転換を思想的に表現するのに重要な役割を果たしたコモン・ローヤーのひとりヘンリー・パーカーはこう書いた。

「以上のことがわれわれを政治のすべてを超えるアクメーへと導く。一切の人間的な法を法たらしめる最高の法へと導く。その法は『人民の福祉』(salus populi)へと導く。国王の大権の法と言えどもこの法に従属する。……征服の権利といえども、君主たちをしてすべての権力の源であり目的である人民に属するものから、自由にするものではない。というのは単なる力は自然のコースを変えることができないし、法を曲げることはできないからである」¹⁴。

このような思想が、レヴェラーズに受け入れられて、『人民協約』となった。しかしそれはパーカーが考えていたことを超えて、その思想が現実の変革のため作用したということである。

注

- (1) A. D. Lindsay, *I Believe in Democracy*, p. 4. (山本俊樹編、朝日出版社テキスト・ブック版)
- (2) 安藤英治「ウェーバー歴史社会学の基礎視角」『思想』(岩波書店) 六七四号、一九八〇年八月、二三一—三五頁。
- (3) K・マルクス「ユダヤ人問題によせて」、『ユダヤ人問題によせて・ヘーゲル法哲学批判序説』(城塚登訳、岩波文庫) 一九頁。
- (4) 今関恒夫『ピューリタニズムと近代市民社会』、一七七頁。
- (5) 常行敏夫『市民革命前夜のイギリス社会——ピューリタニズムの社会経済史』、三二四頁。
- (6) 同書、三二四頁。
- (7) M・ウェーバー『宗教社会学論選』(大塚久雄、生松敏三訳、みすず書房) 五頁。
- (8) A. D. Lindsay, *op. cit.*, p. 11.
- (9) Richard Tuck, *Natural Rights Theories. Their Origin and Development*, 1974, p. 1.
- (10) *Ibid.*, p. 3.
- (11) Georg Jellinek, *Die Erklärung der Menschen- und Bürgerrecht. Ein Beitrag zur modernen Verfassungsgeschichte*. 4. Auflage, in dritter Auflage bearbeitet von Walter Jellinek, Verlag von Duncker & Humblot/München und Leipzig, 1927. イェリネック『人権宣言論争』(初宿正典訳、みすず書房) 八一頁。
- (12) ダントレーヴ『自然法』(久保正雄訳、岩波書店、一九五八年) 六一七頁。
- (13) Georg Jellinek, *op. cit.*, S. 58 f. (初宿訳、一〇七頁)
- (14) Henry Parker, 'Observations upon Some of His Majesties Late Answers and Expresses.' 『国王陛下の最近の回答』

と発言の若干に関する考案」渋谷浩編訳『自由民への訴え——ピューリタン革命文書選』（早稲田大学出版会）四九頁参照。

以上、第Ⅰ部の各論文は、日本私学振興財団「学術研究振興資金」の援助を受けた研究成果である。